

第 22 回全国大会での研究発表を振り返って 発表から広がる研究の地平

佐藤 桐子

2006 年 12 月 9、10 日に京都産業大学で開催された第 22 回全国大会で、私は、久保内端郎先生の司会により、「初期古英語散文における「期間」を意味する対格と前置詞形」というタイトルで研究発表を行いました。私は、この研究発表の半年前（2006 年 6 月）に東京大学大学院で課程博士号を取得し、今回の発表は、博士論文完成後最初の学会発表で、博士論文の内容の一部に関するものです。そこで、博士論文の執筆と研究発表に至る道程を振り返り、このエッセイを書きたいと思います。また、発表の際に頂いた質問がきっかけとなって、これから先考えたい問題が出てきましたので、それについても今後の課題として触れたいと思います。

今回発表した古英語の格と前置詞の問題は、私が 1998 年 4 月に大学院修士課程に入学し、小川浩先生、および寺澤盾先生のご指導の下、古英語の統語論の研究を始めた頃から続けてきたテーマです。修士論文では、*Boethius* の散文版と韻文版における格と前置詞について調査し、特に韻律との関係を中心に修士論文を書きました。1999 年 12 月に修士論文を提出し、2000 年 12 月 9 日、関西大学での第 16 回全国大会で、小倉美知子先生の司会により、「古英語 *Boethius* における手段を表すための格形と前置詞 *mid* - 散文版と韻文版の比較」という発表タイトルで、初めて学会発表をしました。（この発表を元に書いた論文は、*SIMELL* 17 号（2002 年）に掲載されました。）質疑の際に、小倉先生から、格と前置詞の選択にラテン語の影響があるのかどうか、という質問を頂きましたが、先行研究でも明確にされておらず、私自身もこの点を十分に調査していませんでした。そこで、ラテン語との関係を明らかにすることを博士論文の目的のひとつとしました。

博士論文では、古英語期における格形の減少と、前置詞構文の増加という歴史的な変化を主軸とし、その上で古英語テキストの文体的な特徴との関係を明らかにしました。書かれた時代や文体の特徴などを考慮し、*ChronA*、*Bo*、*Bede*、*ÆCHom*、*ÆLS*、*WHom* を調査しましたが、このうち *Bede* について特に興味深い結果が得られました。*Bede* は、一般的にラテン語の逐語訳と言われており、豊富な屈折語尾を持つラテン語の影響で格形が多いことは、古英語の *syntax* に関する研究書や論文で既に指摘されていましたが、影響とはどの程度のものなのか、意味や機能によってラテン語の影響の出方に違いはあるのか、などの問題も含めた包括的な研究はありませんでした。そこで、古英語とラテン語の対応箇所を比較することから始めました。ラテン語の影響を受けるという当初の予測は、間違っただけではありませんでしたが、例外も多く、必ずしも原典に忠実ではないという面が見えてきました。また同時に、*beon geþuhte* などラテン語との関連が重要視される構文に関する井出光先生による一連の論文を読み、ラテン語の影響については慎重に考える必要がある、と思うようになり、なぜラテン語原典の格形を古英語では前置詞形にしたり、逆に前置詞形を格形に変更したりするのかを、文脈に即して考えたり、他のテキストの場合と比較したりし、その結果を博士論文の第 3 章で “*Bede*” という題でまとめました。今回の研究発表では、その

中の “Duration of Time” という section を中心に、他の古英語散文での分布なども合わせて発表しました。

尚、今回の発表の質疑の中で、大野次征先生より、Ælfric の語彙には他作品と異なる特徴があるが、「期間」に使われる語彙にもそのような傾向があるのではないか、というご指摘を頂きました。これについては、「そのことには注意を向けていませんでしたが、今後の調査の中で考えてみます」とのみ回答致しました。その後いくつかのテキストをみたところ、Ælfric を含めて Winchester group に属するテキストでは、「期間」の意味を表すラテン語 *per* の訳語として *geond* を好んで使う傾向があり、これは、研究発表で扱った *Bede* や他の初期古英語散文場合とは異なります。また、小野茂先生が明らかにされているように（例えば最近では、「標準英語の歴史的考察 標準古英語を中心として」『近代英語研究』第 21 号（2005） pp. 1-13）、Winchester group に属するテキストの語彙は、Standard Old English とは異なるとされています。前置詞を含めて、「期間」に関する表現に使われる語彙が Winchester vocabulary の問題と関わるかどうかは、これから調べていくべき問題ですが、格から前置詞への変化に焦点を当てた統語論の研究の中から、語彙選択（この場合は前置詞）という新たな視点が出てきたことを今回の研究発表での成果とし、今後の研究へとつなげていきたいと思えます。